

911.3
八
4

俳諧歌雙兒百首

四



俳諧歌雙児百首四卷

撰者四方歌垣真頬

蚊遣火

裏微加花三

岩城
真酒躬

あまべやふ新宿の夜松と煙されどとゆてゆきの夜宿
衣ひぬくよせきと焚ばぬまく城下のまよひ又つゝき物

八幡
曾代人

なま桔のりもぬまよせぬまよせぬま不宿やもくうへ實む大妻

柿人

うやう葉一弓もと御足もとを都の公馬のまゆりこれ

川名
米

が水のあさくなりとよそややのうりゆきびのゆきび

市住

裏微加花三

市住

おのれのゆき陽はまよと夢散きまよへゆよゆよゆよゆよ

衆折
真住

おのれのゆき陽はまよと夢散きまよへゆよゆよゆよゆよ

金文

おのれのゆき陽はまよと夢散きまよへゆよゆよゆよゆよ

市川
真

おのれのゆき陽はまよと夢散きまよへゆよゆよゆよゆよ

信松代
秀

おのれのゆき陽はまよと夢散きまよへゆよゆよゆよゆよ

金箱荷山
雄

おのれのゆき陽はまよと夢散きまよへゆよゆよゆよゆよ

河文

おのれのゆき陽はまよと夢散きまよへゆよゆよゆよゆよ

泉

おのれのゆき陽はまよと夢散きまよへゆよゆよゆよゆよ

良

おのれのゆき陽はまよと夢散きまよへゆよゆよゆよゆよ

水戸
良

今井

守

難郎さねあと夢くねりゆきはるへまごううを
ひがひがおががく葉ぐれをねくねくねがせめ
かの事とも放棄の頃ハ物のそとをも身をもてて身がせめ
金

あ人のことありてあひてあひて退ひゆふふかせめ
萬夏馬

歩みぬよむ敷吸はらまくの深くとく隠菊さん
根並せよめぬがふせの身を失はうやうり寝あひす
枝成

形属よむねとくわくわく身の相月よましす
金

きをねふかとくれつ身筋をうそ居人金の假想
宣俊

すのあはせすすきくれ相生の力よつとありくと
金メ

改草の相を移ふ名筋の筋して身を仰て門京
千善

あうたのうりよみがは地一とさうりもそみわせす
ね

れくち相をのうりもそみわせす
春則

うちをよふかとくと人を身を差す相の中ふみあひ
唐

あまびやくせよひやくと日敷あらまくとる相をよ
外成

双四ノ一

岡部

鳥柴

真名

神津

中野

真

甲府

今井

千住

立

街

守

水

守

成

米

负

石

島道

目録

花一

仙臺

石

島道

来折

城を大不あきのちうれ葉、やさすひまがてくわづるも

新庄

守

之このときをやまむれとゆの事のひりとも

天童

美

野は人おもゆきの烟りみてされり、野のあせん通す

仙臺

成

うらじ野うきの煙み一火炎て通す通風の里やねき美

柿崎

鳥

うきの煙ひとくすくあれば、火炎ある煙の事とぞく

信赤沼

成

あまくやの煙くもとくすくあれば、火炎ある煙の事とぞく

諫方

成

あまくやの煙くもとくすくあれば、火炎ある煙の事とぞく

入吉

歌

あまくやの煙くもとくすくあれば、火炎ある煙の事とぞく

蓬生

有

あまくやの煙くもとくすくあれば、火炎ある煙の事とぞく

麻生

愛

あまくやの煙くもとくすくあれば、火炎ある煙の事とぞく

全

作

あまくやの煙くもとくすくあれば、火炎ある煙の事とぞく

潮沢

好

あまくやの煙くもとくすくあれば、火炎ある煙の事とぞく

花

竹

あまくやの煙くもとくすくあれば、火炎ある煙の事とぞく

蓬生

成

あまくやの煙くもとくすくあれば、火炎ある煙の事とぞく

麻生

益

あまくやの煙くもとくすくあれば、火炎ある煙の事とぞく

蓬生

文

あまくやの煙くもとくすくあれば、火炎ある煙の事とぞく

新庄

成

あまくやの煙くもとくすくあれば、火炎ある煙の事とぞく

新庄

成

岡
直

卷之二

されどもとまどひのまつりは

高田直

卷之二

あまくちの御宇とて、御簾のひとへまつらうむせむる
福高 茂里

物の事と云ふ事は、何處か見えぬ。山形 清人

極樂之勝境無不臻於八荒而行之莫不極其妙。相
京真豐華

山形
真田
松
年

甲子久唐

佐倉
萬葉
房町

一ノ木立をもつてなれども支障なしの所を植へ
白川木石

酒成
全

改めての煙草の手札を切らさねば、手の筋取の手 漢

卷之二

水野全酒成

人多ふ。改ハ象かん形を失ひ難い。御子の事は御子の事。御子の事は御子の事。

浮城のたゞど根無木のてまご終くぬゆきのほほ
吉田 恒雄

元照

全
全

千善
水戸

音人
全
夏目漱石

信式部文丘
説の事もあらずば、その事もあらずば、彼をこれぞ

時を失ひあがめの形を失ひあらざりふたりと見え
片倉 曾代人

常川 八幡

千葉
西尾
也

あらわくやはのきとすまの壳ふくらひよもよとれく

三千春

めのわらばのきとすまの壳ふくらひよもよとれく

信茂昇

めのわらばのきとすまの壳ふくらひよもよとれく

杉

めのわらばのきとすまの壳ふくらひよもよとれく

甲府

めのわらばのきとすまの壳ふくらひよもよとれく

越後神田

めのわらばのきとすまの壳ふくらひよもよとれく

久

めのわらばのきとすまの壳ふくらひよもよとれく

蓬生

めのわらばのきとすまの壳ふくらひよもよとれく

島人

めのわらばのきとすまの壳ふくらひよもよとれく

蓬生

二袋

川保

金

義藤

又蠶

丸

れの如くのせくゆく一をすとそれハ昔の房のあくよ
向の舟とどもどもとがおんぬかへのくもじすこひ
ひものとどもさきのあればやうむとひのふをとき
あるふ形へ仙つれど思れあくせよもよすれじまをき

川

市

院

あをふ形へ仙つれど思れあくせよもよすれじまをき

全

宇都宮

垣

浦りぬぬくもえびとくわせゆるむじめのあせくらみ

真

山形

千

蓮を六法をあらわすあれはわらをせんが芋かくはく甚難の上

千

積

風あぐすうあれどもあとをせんが芋かくはく甚難の上

千

持

あそびの波かくとくゆをまくをのね入とうがゆう

京

供

盡あそびにかくしまのえもゆりゆきくまくふう

真

直

衆のすと蓮のゆくかくくはまのあふのむろくじゆ

白

柳

ゆの波とままのむかくせんへ種あくはくとくま

猪

駿

き風かくうゆかくうむかくせんへせんじゆん

佐原

岸

衆をのものもまよもめんあくかくへあくまくへ

吉田

住

まよふのばくとまよゆがくゆかくゆ

鷹

記

りかかの風の慶へまづくちむくはうめあくとく

岐阜

駿

波をあくせまくかくまくの蓮大伴生あくわく

戸

衆

波うふのぞくねのあくの強あくせまくの種玉家

唐

秀

庭うふのぞくねのあくの強あくせまくの種玉家

仙臺

作

ね風うかくうむかくうのゆかくうのゆの庭玉家

安原

成

てうふのぞくねのあくの強あくせまくの種玉家

庄内

成

うふのぞくねのあくの強あくせまくの種玉家

松代

成

うふのぞくねのあくの強あくせまくの種玉家

仙臺

成

うふのぞくねのあくの強あくせまくの種玉家

人吉

成

うふのぞくねのあくの強あくせまくの種玉家

梅磨呂

成

うふのぞくねのあくの強あくせまくの種玉家

丸

成

裏微加花三

裏微加花二

あら

とおもひて水をかく水をかく人のつらむけをあがてど

京 長岡

あうとおもひて水をかく水をかくとおもひて水をかくあつまよ

川俣

多うきつゆをかく水をかくとおもひて水をかくとおもひて水をかく

佐原

かかめくわらせとねはまあるあつまと落べ水をかく

杉

かかめくわらせとねはまあるあつまと落べ水をかく

春

かかめくわらせとねはまあるあつまと落べ水をかく

久

かかめくわらせとねはまあるあつまと落べ水をかく

入

かかめくわらせとねはまあるあつまと落べ水をかく

丸

かかめくわらせとねはまあるあつまと落べ水をかく

成

かかめくわらせとねはまあるあつまと落べ水をかく

子

かかめくわらせとねはまあるあつまと落べ水をかく

道

かかめくわらせとねはまあるあつまと落べ水をかく

仙臺

かかめくわらせとねはまあるあつまと落べ水をかく

春

かかめくわらせとねはまあるあつまと落べ水をかく

真

かかめくわらせとねはまあるあつまと落べ水をかく

春

かかめくわらせとねはまあるあつまと落べ水をかく

九

かかめくわらせとねはまあるあつまと落べ水をかく

成

かかめくわらせとねはまあるあつまと落べ水をかく

信 金井

かかめくわらせとねはまあるあつまと落べ水をかく

芳 堂

高畑 歌沙九

新庄 友

君屋 啓

金 文

高畑 歌沙九

新庄 友

君屋 啓

成 文

成 文

今井

丘 守

山中水を用ひて穴へとあふ風をとすてて
水をひふ代つもきの風をひくと詠をある

吉原 街

まゆぬの國の風をあふりてよむれむむむのやく
水をひふ代つもきの風をひくと詠をある

素顔 江都園

水をひふ代つもきの風をひくと詠をある
穴を改めゆきの字をとる風かへとさうぐりされ
音厚の形のゆきをひくと詠をね風のき 全

泉

裏故加花三

仙墓 唐 丸

富津 丸

松 丸

庄内 丸

白川 丸

テ袋 丸

真友 丸

出羽住 丸

根 丸

庄内 丸

来折 丸

若城 丸

文 丸

盛岡 丸

向河原 丸

真酒躬 丸

常 丸

片倉 丸

佐原 丸

盛 丸

庄内 丸

出羽住 丸

上毛室田 丸

事成 丸

成 丸

水をひふ代つもきの風をひくと詠をある
水をひふ代つもきの風をひくと詠をある

京 真直 丸

裏裏美 丸

佐原 丸

盛 丸

常 丸

庄内 丸

出羽住 丸

上毛室田 丸

事成 丸

成 丸

江都園 丸

米次 丸

大道 丸

水をひふ代つもきの風をひくと詠をある
水をひふ代つもきの風をひくと詠をある

升成 丸

藤塚

電

毛既稿

一

成
岱
波
吉田
岐阜
駄山人
志解丸
全
庄内
嘉年子
村松
厚房
文
訓
元
喜
樂
賴
富
原
吉原
清水
素
顔
真
龜

翁
加花三
喜
樂
賴
富
原
吉原
清水
素
顔
真
龜

翁
加花三
喜
樂
賴
富
原
吉原
清水
素
顔
真
龜

翁
加花三
喜
樂
賴
富
原
吉原
清水
素
顔
真
龜

翁
加花三
喜
樂
賴
富
原
吉原
清水
素
顔
真
龜

翁
加花三
喜
樂
賴
富
原
吉原
清水
素
顔
真
龜

翁
加花三
喜
樂
賴
富
原
吉原
清水
素
顔
真
龜

翁
加花三
喜
樂
賴
富
原
吉原
清水
素
顔
真
龜

荒和伎

裏微加花三

翁
加花三
喜
樂
賴
富
原
吉原
清水
素
顔
真
龜

翁
加花三
喜
樂
賴
富
原
吉原
清水
素
顔
真
龜

翁
加花三
喜
樂
賴
富
原
吉原
清水
素
顔
真
龜

翁
加花三
喜
樂
賴
富
原
吉原
清水
素
顔
真
龜

翁
加花三
喜
樂
賴
富
原
吉原
清水
素
顔
真
龜

翁
加花三
喜
樂
賴
富
原
吉原
清水
素
顔
真
龜

翁
加花三
喜
樂
賴
富
原
吉原
清水
素
顔
真
龜

伊勢津
成
十字街

甲府
常
安原
真
豊
水
柴
榮
着

駿府
直
古
猿
古
色
庄内
金
厚

駿府
直
安原
真
豊
水
柴
榮
着

伊勢津
成
十字街

成粒 麻生

やまうらおどりえりうきはくのわいじやうの秋のうね

全 千

うれあるれやれとくもつまほのぞひ行き相のうよ

南新保

秋のぬとゆのくわうすをわきとせのうがくよ

雪

うれのうとくあれどじろくわくめあくとせのう

會津

秋をうたの歌とゆひくうねを落すはだとうれぬ

全 千

おとせうとくうとくやくがおとくあれば遠入秋のうね

福道村

秋をうたの歌とゆひくうねを落すはだとうれぬ

千英

おとせうとくうとくやくがおとくあれば遠入秋のうね

太田原

秋をうたの歌とゆひくうねを落すはだとうれぬ

下

おとせうとくうとくやくがおとくあれば遠入秋のうね

南新保

秋をうたの歌とゆひくうねを落すはだとうれぬ

山文

秋をうたの歌とゆひくうねを落すはだとうれぬ

半田

秋をうたの歌とゆひくうねを落すはだとうれぬ

真富美

秋をうたの歌とゆひくうねを落すはだとうれぬ

東上

秋をうたの歌とゆひくうねを落すはだとうれぬ

中央

秋をうたの歌とゆひくうねを落すはだとうれぬ

友

秋をうたの歌とゆひくうねを落すはだとうれぬ

全

秋をうたの歌とゆひくうねを落すはだとうれぬ

山文

秋をうたの歌とゆひくうねを落すはだとうれぬ

半田

秋をうたの歌とゆひくうねを落すはだとうれぬ

金文

秋をうたの歌とゆひくうねを落すはだとうれぬ

成

秋をうたの歌とゆひくうねを落すはだとうれぬ

麻生

秋をうたの歌とゆひくうねを落すはだとうれぬ

成

人記 美人 藏人 滋人 濡人 丸鷺 人 河真 甲市川 市川長葉 水戸鶴 路大廣 座廣 軒駿 田市川 金成 常下錦

秀

水戸 幸

私事とありてあはれの風を秋の初風

牧布施

志年中もあはれの風を秋の初風

水戸 真

多の風を秋の初風

庄内 長

多の風を秋の初風

唐

多の風を秋の初風

仙基

多の風を秋の初風

水戸

多の風を秋の初風

成

多の風を秋の初風

李

多の風を秋の初風

成

多の風を秋の初風

樹

多の風を秋の初風

哉

多の風を秋の初風

琴

多の風を秋の初風

岐

多の風を秋の初風

成

多の風を秋の初風

秀

多の風を秋の初風

雅

多の風を秋の初風

秀

多の風を秋の初風

喜

七夕

波那細

天水

裏

波

加

花

三

樂眠

拂人

岩城

暖

丸

常雪

新庄

山形

秀

多の風を秋の初風

喜

喜

称津

誠哉ふ縫くぬ物くみゆきすとこの多めの間ちあく水

枝成

三にて縫くせむと早かくお被縫のあくべんのそひの

新庄

裏微加栗二

年くの豊まの縫むそめ縫むつまぬへだの林なりと

名古屋

被縫小星の林をあれし縫くの鳥はあくぬまを

寺

少縫うり縫くとぞ縫いあくせくつまもくとみ

信式部

被縫のうちあくとぞ縫いとぞ縫いとくとくとくとく

房

被縫うり縫くとぞ縫いとぞ縫いとくとくとくとく

真

被縫川早の縫むとぞくとくとくとくとくとくとく

鎮

たのと縫をとぞ縫いとぞ川早とけとくとくとくとく

大門

被縫川早の縫むとぞくとくとくとくとくとくとく

門

たのと縫をとぞ縫いとぞ川早とけとくとくとくとく

市快

被縫川早の縫むとぞくとくとくとくとくとくとく

宮崎

被縫川早の縫むとぞくとくとくとくとくとくとく

千山

被縫川早の縫むとぞくとくとくとくとくとくとく

文

被縫川早の縫むとぞくとくとくとくとくとくとく

本

被縫川早の縫むとぞくとくとくとくとくとくとく

文

被縫川早の縫むとぞくとくとくとくとくとくとく

会津

被縫川早の縫むとぞくとくとくとくとくとくとく

半田

被縫川早の縫むとぞくとくとくとくとくとくとく

真富貴

被縫川早の縫むとぞくとくとくとくとくとくとく

貫戸丸

被縫川早の縫むとぞくとくとくとくとくとくとく

吉田

被縫川早の縫むとぞくとくとくとくとくとくとく

更級

被縫川早の縫むとぞくとくとくとくとくとくとく

真

被縫川早の縫むとぞくとくとくとくとくとくとく

文

被縫川早の縫むとぞくとくとくとくとくとくとく

繁

被縫川早の縫むとぞくとくとくとくとくとくとく

樹

被縫川早の縫むとぞくとくとくとくとくとくとく

秋

被縫川早の縫むとぞくとくとくとくとくとくとく

水

被縫川早の縫むとぞくとくとくとくとくとくとく

春

被縫川早の縫むとぞくとくとくとくとくとくとく

人

被縫川早の縫むとぞくとくとくとくとくとくとく

余

被縫川早の縫むとぞくとくとくとくとくとくとく

人

被縫川早の縫むとぞくとくとくとくとくとくとく

人

岐阜
縣山人

水戸

松枝の生れのうゑもすまゆくかうひもつをかえりん
あらそめおもて一きよをとまつてはひひもよあられ、全

波をふりとくと松枝乃あひこじやく秋のうー山神

信州

房

松枝のを秋ハ七くあれうとおどをせうか山神せむ

水戸

内

松枝ハツカシムくましのせがまくせうか山神せむ

抑人

葉

松枝のをよ牛とくとおどをせうか山神せむ

金

木三成

松枝のあんじゆんうきぎうわーふくもうせむーへりうと

金

木、寿

松枝のあんじゆんうきぎうわーふくもうせむーへりうと

誠方

家

松枝のあんじゆんうきぎうわーふくもうせむーへりうと

金

木、寿

松枝のあんじゆんうきぎうわーふくもうせむーへりうと

清

水

松枝のあんじゆんうきぎうわーふくもうせむーへりうと

房伊尹

塘

松枝のあんじゆんうきぎうわーふくもうせむーへりうと

福島

大門

松枝のあんじゆんうきぎうわーふくもうせむーへりうと

名古屋

空

松枝のあんじゆんうきぎうわーふくもうせむーへりうと

山形

寒

松枝のあんじゆんうきぎうわーふくもうせむーへりうと

真

葛

松枝のあんじゆんうきぎうわーふくもうせむーへりうと

田沼

成

松枝のあんじゆんうきぎうわーふくもうせむーへりうと

大

丸

松枝のあんじゆんうきぎうわーふくもうせむーへりうと

氣仙沼

成

松枝のあんじゆんうきぎうわーふくもうせむーへりうと

麻生

成

松枝のあんじゆんうきぎうわーふくもうせむーへりうと

岩城

成

松枝のあんじゆんうきぎうわーふくもうせむーへりうと

吉

成

松枝のあんじゆんうきぎうわーふくもうせむーへりうと

長岡

成

松枝のあんじゆんうきぎうわーふくもうせむーへりうと

下今町

成

松枝のあんじゆんうきぎうわーふくもうせむーへりうと

直

成

松枝のあんじゆんうきぎうわーふくもうせむーへりうと

花

成

ちのひがくすむわくのきの象は年下をあつて
あやをうれむらむかの様はゆの故つもあたま
天のひとゆめのものとまきうごとあせあらん 福島
あみねのひのひふれゆる湯をうながすを秋の朝 空
肩のあのかくはま金木の川波をくわまん 麻生
あみねの極程のあらわすとまきしれめ秋のモモ
坐まむのく稀まれんとまきを音機うる極程あつて 笑顔
極程のあはまのうぢねなとまきも是金の涼 真春
坐まむのあまとのおととまきがはらの葉 入船
坐まむのあまとのおととまきがはらの葉 大門
坐まむのあまとのおととまきがはらの葉 若成

秋

裏紙加花三
あはれ山葉物もじ極め廣ひまむの秋原 仙臺
秋葉の山葉もまらぐ人の多事中は被と袖とをまつてありと
裏紙 唐
水日晶の月敷袋ともうとえありあひのひゆく秋のあき 中興
そのあはれのきくはまゆきの葉と袖とをまつてありと 諫方
絶えのあはれへりぬゆの葉と袖とをまつてありと 金
絶えのあはれへりぬゆの葉と袖とをまつてありと 名古屋
絶えのあはれへりぬゆの葉と袖とをまつてありと 橋五園
絶えのあはれへりぬゆの葉と袖とをまつてありと 氣仙沼
絶えのあはれへりぬゆの葉と袖とをまつてありと 岩城
絶えのあはれへりぬゆの葉と袖とをまつてありと 山形
絶えのあはれへりぬゆの葉と袖とをまつてありと 星暖
絶えのあはれへりぬゆの葉と袖とをまつてありと 小町
絶えのあはれへりぬゆの葉と袖とをまつてありと 玉
絶えのあはれへりぬゆの葉と袖とをまつてありと 琴繁
絶えのあはれへりぬゆの葉と袖とをまつてありと 丸彦
絶えのあはれへりぬゆの葉と袖とをまつてありと 琴富貴
絶えのあはれへりぬゆの葉と袖とをまつてありと 外成
絶えのあはれへりぬゆの葉と袖とをまつてありと 真雲
絶えのあはれへりぬゆの葉と袖とをまつてありと 真亀
絶えのあはれへりぬゆの葉と袖とをまつてありと 後田
絶えのあはれへりぬゆの葉と袖とをまつてありと 潮来

詠方

貫

かみをひきぬと森のとせばまく林やつてそよぐれ風
めう印のまおとせまふりひ吹もあわぐかま一時遅れ
淮までく迷ひてまれかとま三條路すむりれまを

長九

波那袖

船ふ風もくさきれれせと屋敷も御をゑむ

詠方

枝

かみをひきぬとせまく林やつてそよぐれ風

内

凹

むくと空の屋敷の被ひたまきをねのまく風ふ便へ月

氣仙沼

匝

まくと空の屋敷の被ひたまきをねのまく風ふ便へ月

清

通

ああああああああああああああああああああああああ

水戸

江

あああああああああああああああああああああああ

春

ああああああああああああああああああああああ

群子

入

ああああああああああああああああああああ

長岡

古

裏微加花二

駿府

升成

裏微加花

小町

人

ああああああああああああああああああああ

太田原

昇成

ああああああああああああああああああ

景

人

ああああああああああああああああああ

村

昇成

ああああああああああああああああああ

厚

人

ああああああああああああああああああ

芳

昇成

ああああああああああああああああああ

豆

人

ああああああああああああああああああ

讓

昇成

ああああああああああああああああああ

全

人

ああああああああああああああああああ

鉢田

昇成

ああああああああああああああああああ

真河

昇成

即ちと云ふ事でやせと度て爲うれのま事の少家 桃実

き善きのそとをとおれが向の神も善の神不まづひく
あつむかやすめくらの神もあつむかやまくらの神も

小町 良村

上毛前橋

琴富貴

移居の神不居もく見えぬかやまくらの神もくらの神も

信式部 暗記

松風はせ邊の彦の神もくらの神もくらの神もくらの神も

村松 厚房

得

聖もくらの神もくらの神もくらの神もくらの神もくらの神も

会津 良兄

タ風不せ邊の彦の神もくらの神もくらの神もくらの神も

誠方 真石

秋の神也彦の神もくらの神もくらの神もくらの神も

信方 真石

経内の神もくらの神もくらの神もくらの神もくらの神も

松俊

ナ秋の日は後もくらの神もくらの神もくらの神もくらの神も

数成

目加 大きな神もくらの神もくらの神もくらの神もくらの神も

越後神田 明興

全柳町

海王が象ハザのアゲム神居も風吹派のよばくとアゲム

麻生

あくの御子神もくらの神也

岩城

安成

女

ゆづねもくらの神もくらの神もくらの神もくらの神も

浪

むきよもくらの神もくらの神もくらの神もくらの神も

上毛長根

私用のまくらの神もくらの神もくらの神もくらの神も

南新保

萩山延河もくらの神もくらの神もくらの神もくらの神も

長岡 雪

御のあくまくらの神もくらの神もくらの神もくらの神も

盛岡 花

名ふるき日もくらの神もくらの神もくらの神もくらの神も

全 駿府 弓

葉のやまとくらの神もくらの神もくらの神もくらの神も

実

川木もくらの神もくらの神もくらの神もくらの神も

庄内 薄

ほそもくらの神もくらの神もくらの神もくらの神も

全 東山

菊もくらの神もくらの神もくらの神もくらの神も

全 新庄 繁

玉もくらの神もくらの神もくらの神もくらの神も

全 杉文 成

玉もくらの神もくらの神もくらの神もくらの神も

全 市川 真垣

玉もくらの神もくらの神もくらの神もくらの神も

全 坂廣

仙臺

水戸

吉田

秀

善

羽

百

みうら城の事よりはるは革むきをもつ秋の三物集
物をあてておこなふ様子をもと爲ゆべくへじとぬせやすふ

幸

信坂井

上総

恒

小町

青梅

真

せきと多分の爲めあまんと穂高の風をもとめ波を拂せり

仙臺

水戸

吉田

秀

善

羽

月第く神ふくせばわほのちもまほにほすあくまわ

水戸

吉田

秀

善

羽

秋のえりのまほくわほくへのうれと拂く屋あく

水戸

吉田

秀

善

羽

かくせの烟よ神や塔はひえ落とくと拂く屋あく

水戸

吉田

秀

善

羽

あくのえりのうづくれ清川の岸の生きりうれ葉裏うそ

水戸

吉田

秀

善

羽

登人のまほくわほくへのうれと拂く屋あく

水戸

吉田

秀

善

羽

あくのえりのうづくれ清川の岸の生きりうれ葉裏うそ

水戸

吉田

秀

善

卷之三

福島
三千春

わの原のへりの葉ハゆかうものとてのまゆて 由の原
素音すがわぬ列をもつてハなどあこときとひよるをもと 真湖
碧や月ハわらまむゆをゆそそれはまよせまゆ
あらまふお見え雨の夜をあらまふれかゆの夜の 市佳

波那細

待人恋

歲月考

甲市川

真

一杯あめさすもまよはれどきよまごとひとひとひせり

仙臺

ほくのあくあくせはれのぬふあくくじくぬく

駿府

待ねむのゆひあくすまひをすぬごとくうくれる

水戸

うくのゆひとすまよはれのせむり

直古

ひそくはれのゆひをほりうらはれのゆひ

洲

まひびくはれをはれむわら鳥鳴うみを人ふつまし

水戸

まひびくはれをはれむわら鳥鳴うみを人ふつまし

甲市川

まひびくはれをはれむわら鳥鳴うみを人ふつまし

常道

まひびくはれをはれむわら鳥鳴うみを人ふつまし

麻生

まひびくはれをはれむわら鳥鳴うみを人ふつまし

全

まひびくはれをはれむわら鳥鳴うみを人ふつまし

歌志入

まひびくはれをはれむわら鳥鳴うみを人ふつまし

涌音

まひびくはれをはれむわら鳥鳴うみを人ふつまし

万事馬

まひびくはれをはれむわら鳥鳴うみを人ふつまし

全

まひびくはれをはれむわら鳥鳴うみを人ふつまし

麻生

まひびくはれをはれむわら鳥鳴うみを人ふつまし

千

まひびくはれをはれむわら鳥鳴うみを人ふつまし

列谷

まひびくはれをはれむわら鳥鳴うみを人ふつまし

金

まひびくはれをはれむわら鳥鳴うみを人ふつまし

安

まひびくはれをはれむわら鳥鳴うみを人ふつまし

大

まひびくはれをはれむわら鳥鳴うみを人ふつまし

道

まひびくはれをはれむわら鳥鳴うみを人ふつまし

三浦

まひびくはれをはれむわら鳥鳴うみを人ふつまし

豆成

まひびくはれをはれむわら鳥鳴うみを人ふつまし

大道

音の余まもむまぬづ川むるも車をよ
つらゆのよをかきり奉候のち秋深の時包せよま
高岡のもううひれく神の原をよものをかぎり 真湖
行舟の程よりよりのあくよをなれけり 人吉
船ど重ねて船を漂ひて舟をよし川をよしと 全小
舟のよを船とひひ切船へ漁をよしと寄り 離丸

寐覺怠

波那細
喜えせ一柳下うれしきうそをもんと人を喜ぶる所 真似子
裏教か花三
あくさん一愛のむらを不図のまゝすら喜んでに 仁熊貢
みの角がさめく波のづきりがまきよし夢のまゝ 真村
喜えまくはあどとんのむのねりと柳ともべてしよ 印西歌志久
あわでとく一喜ばき歌ふやがれだれまくゆかり草 群住
喜やあら人ふらがまくわのわく喜えふらひゆれつ 真久
自知

福島 二本法師
昌律 年子

且見憲

波那細
粟々

累々とれりて、やがておまかで、ひきゆくされたり
えとゆき火をともすと、やがておまかとやうづくませ
つうのゆきよもぎ一封の手紙にしめや物うなじ
裏紙加在三
あたまにしめや手紙をつけて、おみづからん。理無事しがれ
裏紙微
此のうへ絶えやがておまかへ、えよのまかやとこゆうえ

石綱真龜常川倉片

目次
卷之三

篠塚

子龜
室田成川又
金丸
時春

波那袖
経年亦

卷之三

石岡

辛未之歲
東方朔
歲在己未
歲在庚申

川答不
貞米

裏微
行路と身、細々とあらわすをもあらざりやむどん 群子

卷之二

年を経て物思ひのむ喫啜どみかかくに筆をさき、朱人
あらゆるよきの筆の如草庵の筆をばもあ細れども、凹

凹朱人

目如
とくしのまめうどーありこじき色あやめんかくと御本
新馬

新得
万隻馬

身のまゝのまゝの昔絶な用わざハシツ及ひを
勤めを怠らぬ爲ハちむせづと一の事本がまときそへ
房伊戸 塙

房伊袖女

かくのうすきとくらむわが花と葉のほのかな香のうね
桃実

經月應

裏機

長岡石綱

渓川　川の水をあわせたてては、こせしわを発せ
名吉屋　名のあふる日ひまづくあがめをじかみす
成歌　成の内　支

庄内
支
名古屋
真
歌成

裏檄加花三
あひの印

隔一夜憲

成哉村人真花岡長眞仁熊水津御

人不知恋

裏檄

かくまとあるのをさうへまくへまくのを

凹

ゆゑのなつかむのをさうへまくへまくのを

鱗馬

ほひかたもとまくとくもとまくのをさうへまくへまくのを

三浦豆

ほひかたもとまくとくもとまくのをさうへまくへまくのを

南新保

ほひかたもとまくとくもとまくのをさうへまくへまくのを

富津雪

ほひかたもとまくとくもとまくのをさうへまくへまくのを

水戸年

ほひかたもとまくとくもとまくのをさうへまくへまくのを

離

ほひかたもとまくとくもとまくのをさうへまくへまくのを

真頬

俳諧歌雙児百首四之卷終



